筆寫生、第三日第四日は一色畫寫生、第五日より第九日迄五日間水彩畫寫生、第十日は批評會、次で閉會式、茶話會といふことに決した、そして講話は其日の實習と常に聯絡を保つやうに、順序に拘はらず進めてゆくとした。

▼第一日の講話は繪畫と婦人との關係、自然美論、第二日は鉛筆畫法、第三日は一色畫法、第四日は墨繪の戸外寫生法、第五日より第八日迄は水彩畫法にして、重に色彩について話し、第九日には西洋繪畫史の一般を述べて講話を終つた。

▼實習のモデルは書物、インキ壺、ラケツト、ボール、茄子、胡瓜、南瓜、桃、日向葵、百合、コツプ等であつた。

▼第二日には多少遲參者があつたが、時間の勵行を望んだゝめ、第三日よりは會員は定刻に必ず集まつた、人力車で一時間もかゝるといふ遠方の人には聊か氣の毒に思つた。

▼實習の時間は十一時に終る筈であるが、會員は皆日本畫の素養はあつても水彩畫は初めてゞ、殊に寫生は曾て試みた事もない人が多く、爲めに熱心な人達は、午後の四時頃迄も席を離れず勉强してゐられた。

▼第一日の講話を修つて後、印刷物の參考品を見せ、第六日の午後には、私の寫生畫百餘枚を見せて一々說明をした、多少會員の心を動かし、熱心の度を增進させたやうに思はれた。

▼十日には田中氏の黑板畫の講話があつて、後會員製作品の批評をした、一人八枚は必ず描いたのであるから、五百枚以上の作品がある筈であるに、陳列されたのは其半數にも滿たなかつた、これは謙遜といへば夫迄であるが、かゝる處へ進んで出陳して批評を受ける覺悟がなくては進步は覺束ないもと思つた。

▼十日の午後には閉會式があつた、君ヶ代に初まり君ヶ代に終つた、報告によれば、修業證書を受けしもの七十名に近く、半は女子師範の卒業生、半は高等女學校の卒業生である、そして出席比例は百分の九七、二二で、曾つて例のない好成績であるとのことである。

▼閉會式が濟んでから茶話會があつた、講師と來賓との談話が濟んで後、會員の唱歌、ピアノ、獨唱、箏曲等の演奏があつた、猶餘興の數々が黑板に記されてあつたが、私は桃山の方の會員の寫生地を見廻はらねばならぬため中途で席を辭した。

▼會長大村氏、敎諭田中、青木兩氏、并びに常盤會幹事諸氏の熱心によつて、此講習會も頗る滿足な成績を見て無事に終つたのは私の最も喜びとする處である、猶會員の內三四の人は引續いて桃山の會へも出席せられ、群集の中を進んで戸外寫生を試みられし、其勇氣と熱心には心より敬服した、そしてこの分にては將來大阪に於て水彩畫の普及は決して空望ではないといふことを固く信じたのである(汀鷗)

澁溫泉より

▽丸山氏の通信に曰く「今年は長谷川君は呑まれぬ無事なり」と書いて紫色の大蛇が鎌首を上げてゐる圖がある

▽又曰く「地獄谷の夜景、天然のイルミネーション壯觀極」と下

には白根山噴火の光景が畫いてある

▽吉川氏より「此地秋草既に咲き亂れ居候へども暑熱は矢張り盛にして、日々の寫生に皆々風の行衛を喞ちおり候有樣、これは地勢の然らしむる所(北鎖せり)なるべくと存候」云々

羽前鶴岡町より

▽「客月二十五日より古郷米澤地方に旅行いたし居候ひしが向ふに參りて得たる寫生は栗及榛の木等の綠葉のみにて莊内地方の明光に接し居りし小生が目には始めは啞然として筆採る氣にもなれず候ひしが遂に一樹の綠や破れたる茅屋さては茶椀のかけにも却つて深き美趣のあることを…世何處とて畫とならざるものやある、アー吾が愚かさよと氣つきて漸く氣も進み筆も動きたる次第に御座候先生にも一度御都合よろしき時は是非當地方に一度は御來遊下されたく願上候海岸抔にも中々風光宜敷處有之候」云々(山宮允氏より)

寫生帖(四)

■住吉で十二時茶屋へ歸つて來たら、麵麭につける砂糖を誰れか皆平げてしまつた■席料二圓は高いれ、赤砂糖二皿で十五錢も酷い、住吉へ往つたらふじ林といふ茶店へ立よるべからず■床几へ腰を下したらグヅ〳〵、オツトあぶない■西照館の女中へおみやげといふて、名物新芋を買つて來て、瀘車の中へ忘れたとか忘れぬとか■石の上にも三年といふが、天王寺子の石の上に四日も續けて座つて寫生してゐた紫式部が有た■六十の寫生隊を、見學の爲として、常盤會の紫や海考茶連が無數にやつて來た時は一寸面喰つた■僕等の學校へ常盤會から見學に來た時も、學校の宿直書記はよほど狼狽の氣味であつた■その時ヲルク四角張つた人もあつたやうだ■そうと知つたら今日鉛筆などやらずに水彩で旨く描いて驚ろかしてやつたものを■モデルの西瓜は旨そうだつた■意地のキタナイ事を言ふのは誰です■いよ〳〵お別れの十六日の茶話會は大に振つたれ■何れも酒なしの素面であれだけのことをやるのはエライ■S先生の帽子の下の饅頭もおかしかつた■二十貫君のホーキボーシは素敵なものさ■R、N君の足藝は天下一品■誰やらの滑稽催眠術はチト古いれ■M、S君の落語、蓄音機、薩摩琵琶何れもお手に入つたものだ■SS君の鎌倉三代記と來たら笑絶、誰だつて腹の皮をよつたれ■おトツサンの立見將軍は本職だ■K、I君の煙草盆三景は、當意即妙と申上る■M先生の夕日の畫はあまり醜弄に過ぎた■僕はホントーかと思つた■こんな事を言つても見ない人には判らない、樂屋落はこの位ひにして置ふ■まだあるよ、天王寺で寫眞を撮つた時J、S君のわるくお洒落したこと

(大阪の部　終)